

北公民館

親子球技大会開催!

8月17日(日)、心配された天候の中、岡田校区青少年育成会の主催で、親子球技大会が岡田中学校を会場に行われました。

午前7時半から各分館の役員の方々が集まり、キックベイスポールとレクリエーションバレーボールの準備にとりかかりました。

関係者の方々の思いが通じたのか、開始前にばらついてきた雨も決勝戦のころにはすっかり青空となり、球技大会を歓迎しているかのようでした。試合結果は次のとおりです。

キックベイスポール

優勝 塩屋  
準優勝 大間

3位 昌農内・北川原

優勝 北川原  
準優勝 上高柳

3位 西高柳・恵久美



▲力強く親子で選手宣誓(恵久美分館、渡邊純一・勇人さん親子)

結果もさることながら、軽スポーツを通じて、親子や地域の方たちが笑ったり、励ましたり、いくつかの瞬間を共有したことが大会の意義につながったと思います。

では、参加者の声を聞いてみましょう。

親子球技大会に参加して

塩屋分館 岡田小学校五年 岡本 涼

ぼくは、お父さんと兄ちゃんと親子球技大会に出ました。去年は一回戦で負けてしまったので、今年がんばろうと思いました。他のお父さんや兄ちゃんたち、友だちと力をあわせ楽しくプレーすることができました。終わったあと、少し足が痛かったけれど、その夜は兄ちゃんたちみんなと花火をしてお祝いしました。とても楽しい一日でした。

優勝できてとてもうれしかったです。また来年、ホームランがけれるようにがんばりたいです。



▲優勝したよー(塩屋チーム)



▲サインはV(北川原チーム)

子どもが育つ地域の和

北川原分館 兵頭 朋子

「やったあ、優勝!」 私たちは、年齢差の意識なく、笑顔で抱き合ったり、手の平をたたき合ったりして喜び合いました。大会前にボールに初めて触れる子どもたちを集め、練習した成果が見られ、小学生は確実にサーブを入れ、返球するなど、その頑張りに驚きました。

また、中学生も大活躍です。みんなに元気よく声をかけたり、小学生を励ましたりする姿。進んでボールを追いかけ、返球する姿。地域の活動に笑顔で前向きに取り組み、全力で楽しむ様子は、親から見ても頼もしく、その成長にうれしい思いで一杯になりました。

この大会で、子どもたちとの信頼関係が一層深められたことは、とても有意義でした。応援をしてくださった方々に心から感謝をしています。

補導センターだより

「叱る」とは

岡田小学校 高石達也

ある時、電車に乗っていた私は、次のような光景を目にした。電車の中で騒いでいる我が子を母親が叱っている。ところが、全く効果が無く、母親は困り果てている。さて、どこに問題があるのだろうか。

他人に迷惑をかけている我が子に対して、叱ることは親として当然の務めである。ところが、「叱る」ことを形式的にとらえている大人が案外と多い。言葉に出せば叱ったことになるとはならず、相手にそのことが伝わらなくては叱ったことにはならない。親の気持ちや伝わったとすれば、子どもは、その行為をやめていたのではないだろうか。

また、「叱る」その心の奥には、その子に対する愛情が無くてはならない。自分の感情にまかせて「叱る」(この場合「怒る」だろうが)のでは、その子に何がいけないことなのかわかるはずがないし、「叱る」「たたたく」では、その子が正しく成長するはずがない。もちろん、言葉で言うほど上手く「叱る」ことは、易しいことではない。私は、次のようなことを心がけている。

- ①命に関わることを除いては、まずその子の話をしっかりと聞くこと。
  - ②なぜいけないのか、どうすればいいのかを考えさせ、指導すること。
  - ③その子の目を見て、言葉だけでなく表情や態度でわからせること。時には、涙を流すことも厭われない。
  - ④その子のすべてを否定するのでなく、その行為を叱り、別の機会に他の行為をほめること。
- いかなる時代になろうとも、人の心の奥底は皆澄んでいると思いたい。その澄んだ素直な心を引き出していくのが私たち大人の役割ではないだろうか。子どものせいにするのではなく、私たちが、「上手く叱る」ことのできる大人」をめざしましょう。